

## 読みが甘いか

前田 峰子

公立中学校でスクールカウンセラーとして働き始めて八年になる。初めの頃、未知の世界に足を踏み入れる不安に悩まされた。すでに二十年近く児童相談所で心理判定員の仕事をしてきたので、どれほど重度障害の人に出会っても慌てふためかない気持ちの準備はできているつもりだったが、学校に訪問者ではなくスタッフの一人として入った時、双方の違和感はかなりのものであった。学校

の管理者側は当時の文部省のスクールカウンセラー配置事業案に積極的に手を挙げ、私が赴任するとすぐスクールカウンセラー活用調査委員会を立ち上げて毎月一回集まりを持ち、校内の相談活動について話しあうことになった。しかし学校全体ではそこはかたない不信感が漂っていた。研究会で出会った先生から笑いながら「まさか文部省のスパイじゃないでしょうね」と言われたこ

ともある。相談の申込は担任を通してという相談室運用規定の項目を、相談者自身直接にあるいは相談専用電話で申し込むことに変えるのにも、かなりの抵抗があった。自分が受け持っている生徒が相談室に行くような悩みを抱えているなら担任として知っていなくては困るという理由であった。確かに同じ学級の生徒が二、三人でちよくちよく相談室に出入りする時は、担任かあるいは特定の先生の授業が面白くない・分らないと訴えることが多く、学級崩壊の前触れのこともある。

また同じ学級で不登校生徒が複数以上の時、担任のコミュニケーション力に問題がないかどうか。授業も部活動も熱心で生徒の家庭にも度々訪問している先生が毎年不登校生徒を四、五人も抱え、でも相談室には一度も見えず、保護者にも相談を勧める気配もなかったので、ある時欠席日数

が三十日以上の子の生徒の保護者宛てに、相談室でお茶飲み会を開きますという案内状を作り、その先生の机上に六通乗せて置きました。他の先生方には、私が「お茶を飲みながら愚痴でもこぼせたら保護者の方たちも少しほっとされるのでは？」と思いましたが「と伝えると納得されて各々の家庭に届けて下さり、出席者の人数は多くはないが大変好評で以来毎年開いているが、前述の先生だけは二通は届けるが後は無駄と突き返された。私は四通に住所を書き切手を貼って投函した。翌週一人の保護者から電話が入り、学校からなんの連絡もなく孤独だった。声をかけてもらって有り難かった。ぜひこの集まりには参加させてほしいとのこと。後日、保護者の集まりに参加されたこの方の子どもは小学校の三年生から担任とうまがあわず登校を渋るようになった。すると担任が毎朝



室への登校という方法もあることを伝えたが父が教室に入らなくては駄目だと反対して登校再開には至らなかった。

しかし翌年の集まりでは参加した母親の二人が子どもを保健相談室に通わせたいと言われ、四月の新学期には五名が登録。一人は一週間続かず長期欠席に戻ったが、他の生徒は遅刻したり休んだりしながらも仲間ができることで元気を取り戻す生徒もあり、あまりに保健相談室が賑やかなので職員室では早く教室に戻すべきだという声も出たり、一方担任の中にはかなり批判的な意見を述べていた人が自分の受け持ちの生徒に欠席が増える」と保健相談室を勧めるようになったりで、最終的には十一人が登録し、二人はこども不登校で一年過ぎた。夏休み以降は人数が多すぎて週に一日の私の勤務では個別に話を聞く時間が取りにくいこ

出勤途中立ち寄って自分の車に乗せていくからと言って玄関で待っているが、子どもはトイレに駆け込んで出てこない。仕方がないので先生に謝り先に行って下さいということを繰り返すうち私も疲れてきて子どもが疲れて行きたくない気持ちも分かったので、思い切って先生にお断りしたら以後全く音信不通で、多分小学校から中学校に、関わりを断った家庭というような連絡が入っているのではないか。私も夫の両親から母親がすっかりしないから大事な跡継ぎが不登校になったと責められていると泣かれた。この方にも一応保健相談

とと保健相談室の中でも、いじめや仲間はずれの問題が出てきたので、相談室グループカウンセリングを始めた。小学校以来の不登校では学力の遅れも勿論気にかかるが、苛められたと不登校になつた生徒が小学校では苛める側だつたという例も少なくなく、自我発達を促すにはどんな方法が

有効かということも常に頭の角にあつたので、試みに他人の話を聞くこと・自分の考えを相手に伝えることだけを枠組みにし、テーマはその日、誰かが話したいと思つたことを話題にする。人数は二人から六人で、三年生の一人は両親の問題で一年の途中から不登校になり、親や親戚からいい高校に入れと言われて、しきりに偏差値にこだわっていたが、毎回一番先に登校して他の生徒が来るまでの間、個別にその悩みを聞いているうちに入試の前日には自分の力で入れる高校で頑張ること

が大事なことだと自分で結論を出し、無事に入学できた。グループカウンセリングでは、個別面接ではとても深入りできないような個々の家庭の具体的な生活実態も話の中で語られ、生徒の一人ひとりを理解するのにとっても大事なヒントを与えられたように思う。

教育も短期に成果をとという声が大きいが、育てる“ことの基本は毎日の細かいことを倦まず弛まず積み重ねていくことではないかと私は思っているが、実際には最も受け入れられない提案の一つである。促成栽培的教育法が人気のある時代、その副作用とも考えられるトラブルが増えている今日、子どもの育ちで困つたことが起きた時には生活の基本を見直すというのは読みが甘すぎるだろうか。

(公立中学校スクールカウンセラー)